

令和元年5月12日現在

機関番号：32682
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2016～2018
 課題番号：16K21429
 研究課題名(和文)近世スペイン軍事文化の移転とアメリカ先住民による受容・放棄に関する歴史学的研究

研究課題名(英文)A Historical Study of the Transition of Early Modern Spanish Military Culture and Amerindian Reactions

研究代表者
 武田 和久(TAKEDA, KAZUHISA)
 明治大学・政治経済学部・専任講師

研究者番号：30631626
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：次の三点が成果である。(1)近世スペイン軍の基本陣形テルシオが、イエズス会士が南米ラプラタ地域に建設した布教区(レドゥクシオン)で暮らしていたグアラニ先住民に伝授されていたこと。(2)布教区に対するポルトガル人主体の奴隷狩り部隊の襲撃に対抗すべく、ラプラタ地域のイエズス会士たちは、グアラニに対する軍事訓練や布教区の防備に加えて、火器を含む軍事物資を確保し、布教区の防衛力を高めたこと。(3)軍事訓練を始めとするヨーロッパ・キリスト教文化に根ざした制度や価値観が、キリスト教界への「平和的な統合」の実現に欠かせないとして、イエズス会士からグアラニに対して強化実践されていたこと。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「宗教が歴史的には軍事、暴力、強制といった問題と浅からぬ関係性を持ってきた」ことを具体的に解明したことが本研究の学術・社会的な意義である。グアラニのキリスト教化に対するイエズス会士の関与は極めて大きい。この目的の実現のために、グアラニは、規律の植えつけや防衛という理由により定期的に実施されたスペイン方式の軍事訓練への参加義務を負った。もちろんこれは、ポルトガル人からの頻繁な襲撃という状況下でイエズス会士がとった苦肉の策ではあったものの、軍事的な事柄が「文化」としてはやされ高い評価を受ける対象となっていた近世ヨーロッパという時代の風土も加味したうえで理解されるべきである。

研究成果の概要(英文)：The outcome of this research can be summarized as follows: (1) the basic military formation, which was called tercio in early modern Spain, was instructed by the Jesuits in the Rio de la Plata region of South America to the Guarani Indians who lived in the community town referred to as a Mission or Reduction. (2) For the purpose of self-defense against the intrusion of Portuguese slave hunters, the Jesuits engaged in not only the periodical military training of the Guarani Indians and the fortification of their Mission towns, but also tried to store a variety of military weapons and strengthen the defense capability of the whole Mission. (3) The Guarani Indians were required to get accustomed with the institution and concept of values based on the European Christian culture of some which included military training and this requirement had been considered indispensable in order to realize the “peaceful integration” of cultural alterity outside Europe into the ideal Christendom.

研究分野：ラテンアメリカ史

キーワード：スペイン 軍事組織 ラプラタ地域 イエズス会 グアラニ先住民

1. 研究開始当初の背景

スペイン植民地期の南米ラプラタ地域（現在のパラグアイ南東部、アルゼンチン北東部、ブラジル南部、ウルグアイからなる領域）には、カトリック修道会イエズス会の会員たちが1609年から1768年にかけて運営した布教区（スペイン語で *reducción* もしくは *misión*）が存在した。布教区とは、先住民をキリスト教化するための居住地であり、様々な修道会によってスペイン領各地に建設されたが、ラプラタ地域のイエズス会管轄下のそれは世界的にも特に有名である。同地域の布教区では一世紀半にわたりグアラニ語を話すグアラニ語系先住民のキリスト教化が大規模に進められた。布教区は18世紀前半には総数30に達し、総人口は14万人を超えた。

布教区では、キリスト教のみならず、ヨーロッパ発祥の諸制度、技術、文化がグアラニに伝達された。同様の試みは、イエズス会士がスペイン領南米各地（主にメキシコ北部、ボリビア北東部、チリ南部）に建設した布教区でも実践された。しかし他地域と比べて、ラプラタ地域のイエズス会士の活動で興味深いのは、グアラニに対する軍事訓練である。スペインの海外領土統治の根幹「インディアス法」では、アメリカ先住民によるあらゆる武器の使用、保持、売買が禁じられ、彼らに武器の製造・使用方法を教えた者は処罰の対象とされた。しかしラプラタ地域のイエズス会布教区では、こうした原則は適応されず、軍隊経験のある助祭士の指導の下、グアラニは、ヨーロッパ、特に近世スペインで発展・実践された戦闘術を学んだ。

インディアス法に抵触しながらもグアラニと軍事との関わりが是認されたのには、ラプラタ地域特有の地政学的な理由がある。同地域はブラジルと近接し、ポルトガル人指揮下の遠征隊の侵入を頻繁に受けていた。しかしこうした領土侵害に直面したスペイン王室には、人手・財政の面に対抗可能な余力はなかった。そこで注目されたのが、イエズス会布教区のグアラニである。布教区はブラジルとの領土境界線に近い土地に次々と建設され、そこで暮らすグアラニはさながら駐屯兵の役割を担った。実際にラプラタ地域のイエズス会士ならびにスペイン人の手記では、布教区は「要塞」や「防護壁」に例えられた。

これまでの研究により、布教区内に先住民軍事組織が存在し、定期軍事訓練が行われていたこと、そしてスペイン王室ならびに総督の命を受けたグアラニは頻繁に動員され、幾多の戦場で戦闘にかかわったことが判明している。しかしこうした事柄は、布教区ないしラプラタ地域というローカルな場での軍事状況の研究成果である。これに対して本研究が目指したのは、ローカルな軍事状況とグローバルなそれとの接合であった。

コロンブスによるアメリカの「発見」（1492）直前のスペインは、およそ800年続いたイスラム教徒との戦いの最終局面にあり、またイタリア発祥のルネサンスの影響下にあった。数百年にわたる異教徒との断続的な戦闘は、特有の戦闘技術や軍隊の編成原理が生み出される土壌をスペインに提供し、この状況が、ルネサンスの過程で注目されるようになった古代ギリシア、ローマの軍事思想、制度、技術の読み直しと融合し、スペインを世界帝国に押し上げた「テルシオ」と呼ばれる近代的な軍隊組織の誕生へとつながったのである。

ラプラタ地域のグアラニ布教区で活動したイエズス会士の手記には、先住民軍事組織はスペインのそれと酷似し、また訓練も、スペインで実践されるのと同様のやり方だったとある。つまり同地域のローカルな軍事状況は、大西洋を越えて宗主国スペインのそれと密に関連していたのである。この事実は、大西洋を越えて旧大陸から新大陸にもたらされた軍事文化の移転の問題、また両大陸で大きく異なる軍事文化同士の融合という具体的な帰結を明らかにするための鍵となる。

スペインは、アメリカの「発見」を契機にその領土を急速に拡張し、16世紀には世界帝国の地位を確立した。これを可能ならしめた要因の一つは、スペインが世界に誇った軍力である。「テルシオ」として知られるスペイン軍の勢いは遠くアメリカ大陸にまで達し、インカやアステカなど巨大な先住民帝国を矢継ぎ早に征服した。16世紀スペインのテルシオについてはすでに精緻な研究が存在する。しかしこれらの議論は、スペイン領アメリカの軍事状況との関係にまでは及ばない。

他方で、スペイン海外領土の軍事システムについては重要な研究が出ている。しかしこれらの関心は、スペイン領アメリカ各地の海岸部に建設された要塞の構造や機能に集中したり、海外領土防衛部隊内でのスペイン本国出身者と植民地生まれのスペイン人との関係などにあった。本研究が目指したように、スペインないしヨーロッパ発祥の軍事技術・制度がアメリカ先住民に導入されたことによって起きた社会文化的な帰結という、大西洋を媒介にした軍事文化の移転に着目する視点とは大きく異なる。実際に軍事に関しては、ヨーロッパとアメリカの双方を見据える視点が研究者の間で欠如していると、A. Espino López などによりすでに指摘が出ている。

軍事史という領域に関しては、例えばこれまで、歴史的に名高い合戦や戦局の経過に関して詳細な研究がなされてきた。しかし第二次世界大戦後から20世紀中葉にかけて、世界的な傾向として、軍事史研究に関わる者は戦争賛美者と批判され、軍事関連の学術研究をタブー視する風潮が続いていた。

こうした傾向が見直され始めたのが20世紀後半以降である。軍事史を社会史と関連づけて研究する考え方が出てきたことが契機である。例えば、ある地域で誕生・発展した軍事発明品や技術（新たな築城術や銃器製造の方法など）が別の土地に伝播し、そこで移入された技術が

どのように定着、改良、放棄されたのかという問題である。また、軍隊組織の特徴である規律化、階層化、画一化といった原理・考え方が、人間一般の生活、思考、慣習、行動様式といった事柄に与えた影響の解明などにも、研究者が注目し始めた。しかしこうした研究の共通点は、ヨーロッパ地域に主眼をおく軍事社会史研究である。同地域で育まれてきた軍事思想や技術が歴史・文化的に大きく異なる遠隔地に伝播したことで生じた社会文化的インパクトの解明にまで踏み込もうという視点が欠けていたことは否めない。

2. 研究の目的

本研究では、イスラーム教徒との戦いの終焉ならびにルネサンスの勃興という 15 世紀末から 16 世紀初頭のスペインで実践されていた軍事にまつわる思想、理論、戦術、制度、組織などが、ラプラタ地域のイエズス会布教区のグアラニ先住民にいかんして伝達、受容され、グアラニ自身がどのようにこれらを受容あるいは放棄したのかといった問題を、中近世スペインで出版された軍事教練書、軍事に関する様々な法令ならびに命令文書、軍事役職者ならびに兵員名簿、イエズス会士の手記などの分析を通じて明らかにした。この研究は、ヨーロッパ世界から非ヨーロッパ世界への軍事技術、制度の移転という軍事史的な視点を重視しつつ、加えてこうした移転がアメリカ先住民の社会・文化の変容に与えた影響の解明も視野に入れ、文化的なアプローチも重視するものであった。

3. 研究の方法

本研究では、グアラニ先住民軍事組織の実戦での機能の仕方を諸史料の分析を通じて解明した。グアラニに関わった大規模な戦乱としては、(1)現在のパラグアイの首都アスンシオンで勃発したコムネロスの乱(1721-35)、(2)ラプラタ川河口にポルトガル人が1680年に建設した軍事要塞コロニアをめぐるスペイン・ポルトガル両国がおよそ100年にわたり繰り返した領土紛争(1680, 1704-05, 1735-36, 1762-63)、(3)同じくアメリカ大陸における両国の領土境界線の確定をめぐる勃発したグアラニ戦争(1750-56)に大別できる。

これらの戦闘に関わる諸史料を書き手や内容に従って大別すると次の三つに分けられる。(A)従軍司祭としてグアラニと行動したイエズス会士の手記、(B)戦闘に携わったスペイン・ポルトガル人兵士の回想録や、スペイン・ポルトガル両国の王室役人や官吏が出した命令書、(C)グアラニ自身が他のグアラニやイエズス会士、スペイン王室に宛てた手紙や嘆願書である。それぞれの史料は同じ戦乱を扱いつつも、書き手の立場や意図に応じて、記述内容に様々な特徴が認められる。

(A)は、普段グアラニと生活し、彼らに軍事訓練を施していた当事者が記したものである。イエズス会士は訓練が的確に実施され、その成果が戦場で適切に反映されている状況を本国スペインの王室役人や官吏に説明せねばならなかった。このため彼らの手記には、軍功を可能な限り高く評価する傾向が見られるが、先住民軍事組織の構造やグアラニ兵士の装備に関する詳細、軍隊編成の仕組みなどを知る上で有用な史料である。

(B)は、戦地でグアラニと行動したスペイン人兵士、またこれを迎え撃つポルトガル人兵士が記したものである。彼らはイエズス会士とは異なり、戦場でのみグアラニと関係する立場にあるため、実戦におけるグアラニの戦いの様子を第三者的な立場から記述する。戦場には、天候、季節、日中・夜間といった戦闘の時間帯、宣戦布告なしの奇襲やゲリラ作戦に基づいた攻撃と、これに対する防御など、訓練とは様相を異にする諸要因が存在する。こうした実戦の舞台において、グアラニが普段の軍事訓練の成果をどの程度まで発揮したのか、あるいはできなかった(意図的にしなかった)といった問題を、スペイン人・ポルトガル人が記した手記を通じて解明できる。

(C)は、(A)や(B)と比べて数は少ないものの、戦闘に携わったグアラニ自身が記した記録として、重要な史料価値を有する。(A)や(B)の史料では、グアラニが総体として捉えられ、彼らの戦闘の様子が綴られる。これに対して(C)は、グアラニが一個人として自身の考え、欲求、行動等を記した記録である。具体的には、コロニアの2回目の攻防(1704-05)の際に、あるグアラニ兵士が布教区を出発してからラプラタ河口で従軍し、後に帰還するまでの数ヶ月の出来事を綴ったといわれている日記が現存する。また18世紀中葉のグアラニ戦争では、スペイン・ポルトガル両国の領土境界線の変更をめくり、これに賛成・反対するグアラニ同士で種々の書簡が交わされた。グアラニによるこの種の記録は、普段の軍事訓練や戦闘に関わる自分自身をどのように捉えていたのかという、彼らの「自己同定」の仕方を解明するのに役立つ。

本研究では、このように三タイプの異なる史料を比較分析することで、グアラニの定期訓練の様子、実戦における訓練成果の表れ方、異なる文化的背景のもとで発展してきたスペイン伝来の軍事組織・制度がグアラニにとって持ち得た意味を解明した。

4. 研究成果

本研究の初年度である2016年度の研究成果は次の通りである。16世紀のスペイン軍の基本的な陣形テルシオが、同国統治下のラプラタ地域においては、イエズス会士が建設、運営した布教区で暮らしていたグアラニに伝授され、実戦でも使われていた事実が明らかになった。テルシオを組むには数学に基づく緻密な計算や、一糸乱れぬ隊列を維持するための規律や克己心が

兵士それぞれに要求された。テルシオの陣形としては具体的には三角形、四角形、五角形、六角形、八角形、楕円形、ひし型、十字架型など様々あったが、この中に半月の陣形というものがあり、この陣形は、16-17世紀のスペイン本国ならびにその支配地域で出版された各種の軍事教練書でも紹介され、平方根といった数学の計算式と合わせて紹介されていた。そしてこの半月の陣形なるものがグアラニ先住民に対してもイエズス会士によって教えられ、かつ実践されていた事実が明らかになった。こうしたことは、2016年12月にチリのサンティアゴ・デ・チレ大学発行の学術雑誌『社会史および精神史雑誌』(*Revista de Historia Social y de las Mentalidades*)に掲載されたスペイン語論文としてまとめた(2016年12月発行)。

本研究の次年度にあたる2017年度の研究成果は次のとおりである。本年度は、ラプラタ地域において、イエズス会士が1609-1768年にかけて同地で設立・運営した総数30の布教区で進められていた銃器配備の実態について、主にスペイン語史料の読解に取り組んだ。ラプラタ地域のイエズス会布教区は、ポルトガル領ブラジルに隣接するという地政学的な条件もあり、1620-1630年代にかけてポルトガル人が率いる先住民奴隷狩り部隊バンデイランテの頻繁な襲撃に見舞われた。こうした状況で同地域のイエズス会士たちが採ったのが、武力を基にした自衛であったことが明らかになった。

こうした研究の具体的な成果としては、査読審査を経て刊行された論文「17-18世紀スペイン領南米ラプラタ地域のイエズス会布教区における銃器配備」である。本稿ではまず、バンデイランテによるイエズス会布教区への頻繁な襲撃に対して、イエズス会士たちが武力で応戦することで一致した経緯を論じた。次に、ヨーロッパのイエズス会上層部がラプラタ地域の同僚たちの決定をどのように捉えていたのか、また上層部の決定に対して採った同地域のイエズス会士たちの行動を論じた。そして最後に、上層部の意思に反するかたちで、ラプラタ地域のイエズス会士たちが、先住民グアラニに対する軍事訓練や布教区の防備に加えて、様々な方策を通じて火器をはじめとする軍事物資を確保し、布教区の防衛力を高めたことを論じた。

イエズス会士たちが採った軍事物資確保のための具体的な方策の解明にあたり、本稿では種々の史料を比較検討しながら全体像を復元した。この作業を経て明らかになったのは、(1)スペイン人総督から布教区に数年にわたり一定数の銃器が渡されたこと(供与)、(2)イエズス会士たちも自己資金を使って銃器を買っていたこと(購入)、(3)そして幾つかの布教区には炉が設けられ、イエズス会士や外部のスペイン人専門家の指導を受けたグアラニが火器を作っていたことなどである(製造)。こうした多様な方策により布教区において軍事物資が確保されていたことには、ラプラタ地域のイエズス会士たちの組織的な関与が認められる。

このような研究を進めたのと並行して、2017年12月には、岡山大学で研究発表を行った。ラプラタ地域で軍事に関与したイエズス会士たちはそもそもいかなる組織原理の下で会員として自己同定し、活動していたのか。一般にイエズス会とは近代的な修道会として特異な存在とみなされがちだが、その特異性は、通時的かつ共時的な観点から比較した場合、どのように見えてくるのか、「イエズス会の近代性」がいかなるものであったのかを再検討しようという提言をこの研究会で行った。

本研究の最終年度にあたった2018年度の研究成果は次のとおりである。本年度は、17-18世紀のラプラタ地域のイエズス会布教区で展開されたグアラニに対する定期的な軍事訓練を始めとするヨーロッパ・キリスト教文化に根ざした制度や価値観が、スペイン植民地体制への先住民の「平和的な統合」のための手段としてイエズス会士たちによって活用されていたことを解明した。「平和」という言葉の意味合いは歴史的に見れば今日の一般的な理解とは大きく異なる。例えば中世ヨーロッパにおいては「神の平和」という運動が展開されたが、この運動には、無秩序に繰り広げられる暴力の抑制という側面のみならず、「キリスト教的な観点からの平和」の構築という目標が掲げられていた。つまりキリスト教徒にとっての平和とは、イエスの教えが広域に広がり定着した状態を指し、そのような状態の実現のためには、時として強引なやり方も許容されるということである。

イエズス会布教区で実践されていた生活の仕組みやスタイルに着目して研究を進めた結果、「規律の強化」という特徴が著しかったことが明らかになった。先住民にはヨーロッパ人が理想とする時間通りの規則正しい生活、一糸乱れぬ集団作業や祈りの実践、曆に基づく各種宗教儀礼の開催など、「規律」なくしては達成が困難な生活を営むことがグアラニ先住民には課せられていた。努力や忍耐によってこれに慣れ親しんだ者は「理想的なキリスト教徒」として誉れの対象となり、適応できなかった者は「不適格者」という烙印を押されて差別の対象となった。イエズス会布教区における「平和的な統合」の実態とはこのようなものであり、先住民を対象とした定期的な軍事訓練や幾多の実践もこうした統合の実現に少なくない影響を与えたと考えられる。

こうした研究の成果は、イギリスの Bloomsbury Publishing が手掛ける学術書シリーズ *A Cultural History of Peace* の第3巻 *A Cultural History of Peace in the Renaissance 1450-1650* に「Peace as Integration」というタイトルの論文として公になる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Kazuhisa Takeda (武田和久) “Las milicias guaraníes en las misiones jesuíticas del Río de la Plata: un ejemplo de la transferencia organizativa y tácticas militares de España a su territorio de ultramar en la primera época moderna,” *Revista de Historia Social y de las Mentalidades*, 査読有, 20(2), 2016, pp. 33-72 (南米チリ、サンティアゴ・デ・チレ大学発行の学術雑誌に掲載)。

武田和久 「17-18世紀スペイン領南米ラプラタ地域のイエズス会布教区における銃器配備」『国際武器移転史』、査読有、第4号、2017年、pp. 63-88。

Kazuhisa Takeda (武田和久) “Peace as Integration,” Isabella Lazzarini (ed.), *A Cultural History of Peace*, (Volume 3: *A Cultural History of Peace in the Renaissance 1450-1650*), London: Bloomsbury Publishing, 2020, in press.

〔学会発表〕(計2件)

武田和久 「イベリア世界におけるイエズス会士 キリスト教軍事文化の拡散者」スペイン史学会・イベリア・ラテンアメリカ文化研究会 (SECILA) 共催研究会、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス (兵庫県) 2016年7月。

武田和久 「イエズス会の近代性を相対化する 比較的アプローチ」岡山大学文学部平成29年度プロジェクト研究「宗教マイノリティと貧困に関する史的考察」第1回研究会、岡山大学津島キャンパス (岡山県) 2017年12月。

6. 研究組織

研究代表者氏名：武田和久 (TAKEDA, kazuhisa)

明治大学・政治経済学部・専任講師

研究者番号：30631626